様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０６７４２

研究課題名（和文）日本中世折衷様建築の対外交渉史的再検討―東アジア海域史から見た建築様式の再定義

研究課題名（英文）A Study on Eclectic Architecture in Medieval Japan: Redefining Architectural Styles from the Perspective of East Asian Architectural History

研究代表者
野村　俊一（NOMURA, Shunichi）

東北大学・工学研究科・准教授

研究者番号：４０３６０１９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題を通して、中世日本で展開した折衷様建築をめぐって、東アジア海域での交渉関係をふまえながら、その意匠と技法の系譜を詳細に検討した。そのために、日本に留まらず中国大陸全土に現存する遺構の現地調査を進め、その実態を悉皆的に検討した。その調査結果をふまえ、おもに台輪・頭貫・燧梁・減柱といった、おもに禅宗様建築にみる部材や技法の東アジアにおける分布と、そこから言い得る建築情報流通プロセスについて、和様建築への影響と併せて考察を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今まで日本建築史学では、中世の折衷様建築について、日本の状況に限定しその系譜を叙述するものがほとんどであった。戦前・戦後まもなくは、その類型化の試みがいくつかの研究者らにより進められてきたものの、近年は折衷様あるいは和様という言葉で一元化するものが多いのである。
鎌倉期以降、和様に大仏様や禅宗様が加味されてゆき、全国にさまざまなキャラクターを持つ建造物が開花した。中国建築の影響もあって、かつ日本独自の状況と併せて、特徴のある意匠と技法が散見されるようになったのである。本研究は、日本の折衷様建築の実態をより詳細に理解するための基礎的研究としても意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I have attempted to examine the genealogy of architectural designs and techniques of the eclectic architecture developed in medieval Japan, taking into account the external relations in the East Asian seas. To achieve this goal, I surveyed existing structures in Japan and mainland China and thoroughly examined their actual conditions. Based on the results of this research, I have attempted to investigate the distribution of components and techniques in Zen Buddhism-style architecture, such as Daiwa, Kashiranuki, Hiuchibari, and reduced pillars, and the process of information distribution that can be said to result from this distribution.

研究分野：建築史

キーワード：日本建築史　中世　折衷様　禅宗様　大仏様　和様　様式

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本建築史の代表的な様式概念に「和様」・「大仏様」・「禅宗様」が挙げられることは言を俟たない。とくに後者二つを建築史家太田博太郎（1912―2007 年）が再定義したことは周知の通りである。太田は「大仏様」の典型例として東大寺南大門・東大寺開山堂・浄土寺浄土堂・方広寺大仏殿などを、「禅宗様」の典型例として円覚寺舎利殿などを挙げ、併せて、採用された寺院の文脈に即して「天竺様」を「大仏様」に、他方で「唐」にみる多義性を批判し、禅宗建築として伝来・持続した経緯から「唐様」を「禅宗様」に改めた。一般に、「和様」がこれら二つの様式が成立する以前のものとして、そして、これらの様式を混合させたものが「新和様」や「折衷様」と理解されるに至っている。

しかし、はたして我々は、現状の様式概念のみだけで、日本中世に創建された仏堂・仏殿を、個別具体的な特徴までも勘案し、かつ東アジア建築史に位置づけながら、微細かつ包括的に理解できているであろうか。

「和様」・「大仏様」・「禅宗様」・「折衷様」のうち、前者の三様式はもっとも有名ではあるが、典型事例は実のところ極少数に限られる。遺構の数が最も多いのは紛れもなく「折衷様」建築であり、様式をさまざまに混合し組み合わせた多種多様な建築が、日本全国に多数存在するのである。留意すべきは、これら「折衷様」建築が、同一の様式概念で均一的に明示されている現状である。このため、日本中世文化と東アジア対外交渉史の痕跡の一端を徴付けた多数の建築に関する通時的・共時的かつ詳細な系譜が見え難くなっているのではないかだろうか。くわえて、「大仏様」・「禅宗様」建築ですら、各々の典型例にさまざまな差異が見受けられることを我々は忘れてはならない。

「折衷様」建築にみる意匠・技法・空間は、様式概念成立以前の当時において、どのように流通し、受容され、具現したのであろうか。さらには、「折衷様」建築を構成する各部分は、どのような組み合わせで理解され、取捨選択されたものだったのであろうか。本研究は「折衷様」建築の多様性・多義性に改めて着目し、その意味内容や背景と併せ再検討を試みるものである。とくに東アジア対外交渉史との接続を試みながら、日本建築史の様式概念の再定義を志向したい。

２．研究の目的

本研究の目的は、東アジア海域交流史の観点から、日本中世に興隆した「折衷様」建築の意匠・技法・空間をより詳細に再検討し、日本建築史における様式概念の再定義を試みるものである。「折衷様」建築をはじめ、これらのベースとなる「和様」、「大仏様」、「禅宗様」の仏殿・仏堂にみる各部分の要素が、各々どのような来歴により東アジア海域を流通し、どのように各地域で取捨選択され、個別具体的な建造物として結実したのか。この問いのもと本研究では、実際に具現化した歴史的建造物の遺構にくわえ、厨子・宮殿などの小木作やミニチュア、指図や詩画軸などの画像、発掘された建築部材などを子細に検討することで、「折衷様」建築を形成した部分の意匠・技法とその流通プロセス、組み合わせの解釈、建造物および空間全体の再構成のあり方について、対外交渉が頻繁に行われた中国の事例と併せて総合的に比較検討する。

３．研究の方法

中世「折衷様」建築の意匠・技法・空間を再検討するべく、本研究では、鎌倉期から室町期までに創建された「折衷様」建築を、中国の唐～元代に創建された遺構をはじめ、関連する厨子・宮殿・画像・部材・文献にみる建築情報をも勘案しながら、大きく以下三つのテーマに集約し具体的調査・検討を行う。

（１）　軒下の技法・意匠と取捨選択――とくに組物・台輪・頭貫の組み合わせに着目して

栄西が関与したと言われる東大寺鐘楼は、詰組が採用された一方で台輪が存在しない。双斗や平三斗などの中備組物が採用されながらも台輪が存在しない建築は和歌山をはじめ関西以西に散見され、典型的研究目的な禅宗様建築と似て非なる点が散見される。これら軒下のデザインは、近世の木割書が示唆するとおり、建築の形式を分別する重要な一要素である。他方で、中国でもこの軒下組物と台輪・頭貫の組み合わせに様々な通時的・共時的バリエーションが見られることが明らかになりつつある。以上を踏まえ本テーマでは、東アジアにおける建築の顔を決定づける軒下の要素がどのように流通、取捨選択されたのかについて、構成要素の組み合わせがいかに流通したのかという観点から、具体的に検討する。

（２）　柱間装置・造作材の空間文節――とくに建具・柱・天井・床の組み合わせに着目して

同じ「折衷様」でも、地域によりその様相は大きく異なる。例えば東国では、鑁阿寺本堂を筆頭に、禅宗様建築の主屋に床を採用した事例が、かつ福生寺観音堂のように来迎柱を後退させた事例が多数散見される。また、延命寺地蔵堂のように、円覚寺舎利殿と同様の、礎石下端からの寸法取りを基準とした正方形のプロポーションがみられる事例も散見される。房総半島には、中国寮代創建の仏堂と類似した架構を採用したものも見出せる。他方で、西国には内陣と礼堂の天

井高に変化が見られる画期が指摘されており、明王院本堂のように礼堂の天井のみ輪垂木天井を採用するものも見られる。このように、折衷様建築の空間を徴づける個別の要素に、様々な差異を見出すことができる。以上を踏まえ本テーマでは、内・外部空間を分節する柱間装置や造作材に着目し、空間の実態とその意味、各部材の取捨選択や組み合わせの実態について、中国大陸の事例と比較しながらその系譜を検討する。

（３）　東アジアにおける建築の表象と情報の流通――建築情報メディアとしての厨子等

「折衷様」建築にみるデザイン情報の表象・流通プロセスを明らかにすべく、厨子・宮殿・画像・部材といった、実物の建築のミニチュアや、実際の建築を模した文物を取り上げ、表象された意匠・技法をはじめ、伝達した履歴、背景にみる理念に着目し、建築情報が東アジア海域でどのように個別具体的に翻訳され、流通・取捨選択されたのかを考察する。規模・次元の異なる建築のミニチュアや二次史料にあえて着目することで、東アジアにおける建築の受容・認識論・存在論・技術論・意匠論について、建築史学・対外交渉史的立場から問う新たな試みである。

４　研究成果

本稿では研究成果のうちとくに折衷様建築にも大きく関わる減柱と台輪との関係を報告する。

（１）「下物を覆う」台輪

禅宗様建築の典型例となる円覚寺舎利殿をみると、台輪は側廻のほか、内部空間主屋の大瓶束と来迎柱を通る頭貫上に載せられ、各々の上端で詰組が成立していることがわかる。この台輪は中国語で「普拍方」と呼び、中村達太郎の『日本建築辞彙』によれば「上物を支承しまたは下物を覆う」もの、『日本国語大辞典』によれば「上の物を支え、さらに下の物を覆う役割をする」ものと説明される。また、『《営造法式》辞解』によれば、柱頭あるいは頭貫の上にあるもので、鋪作の大斗が上に載るものと説明がされている。日本の建築史家や修復技術者は、台輪をその上端に詰組を乗せるために、大斗を安定させる横架材という理解をたびたび示すが、これら辞書上の「下物を覆う」部材としての指摘は管見の限り既往研究などで見出せない。

台輪は薬師寺東塔などの古代の仏塔ですでに用いられてきた。禅宗様建築でみるような詰組とワンセットで用いられた事例は、法隆寺の境内に移築された富貴寺羅漢堂が初見である。顕密寺院の中世仏堂で本格的に台輪が用いられた初例は、栃木県にある鑁阿寺本堂である。鑁阿寺本堂は禅宗様建築に類似しており、円覚寺舎利殿と同様に側廻にくわえ室内にも台輪が用いられ、かつ頭貫と飛貫と併せてワンセットで用いられている。山口県の功山寺仏殿や和歌山の善福院釈迦堂といった黎明期における禅宗様建築の側廻と室内でも、台輪は頭貫や飛貫とともに用いられている。西国や鎌倉に留まらず福島県をはじめとする東国には禅宗様建築の影響を受けたものが数多く現存するが、側廻と室内において、台輪が同じように頭貫・飛貫とワンセットで用いられたものが多数散見される。

この台輪と頭貫・飛貫の取捨選択をめぐって、関西や瀬戸内の顕密寺院では様相が若干異なる。例えば、香川県の本山寺本堂は台輪がなく、頭貫と飛貫で架構が固められているし、 和歌山県の長保寺本堂では、内外陣境において頭貫と飛貫で軸部が固められているが、台輪が無い。後者には、台輪が無いにもかかわらず中備組物があることにも留意しておきたい。また、広島県の明王院本堂では、側廻にのみ台輪が用いられ、頭貫・飛貫とセットで軸部が固められているが、室内では台輪が用いられていない。

（２）台輪と頭貫の取捨選択

このようにみると、台輪は確かに禅宗様建築に多くみられる一部材だが、この様式固有のものというわけでは無いことが分かる。また、東国では側廻のみにとどまらず、禅宗様建築と同様に早いうちから内部空間でも用いられる傾向にあった。おそらく、鎌倉で造営された禅院建築からの影響があったためと思われるが、いっぽうで関西や瀬戸内における顕密の中世仏堂では、台輪が側廻のみで用いられるなど、一部の採用だけで留めるものが散見される。頭貫と飛貫のみで柱上の軸部を固めたものが多いことにも留意しておきたい。台輪が単独で流通したさまを窺える。

頭貫は、日本では法隆寺以前から存在し、例えば山田寺回廊でもすでに用いられていた。この頭貫について大森健二は、古代の頭貫は横架材としての意義はあまりなく、構造材として効かせるためには断面寸法を大きくして合理的な仕口の緊結が必要だったと説く。そして、その後、鎌倉期以降にいわゆる大仏様や禅宗様の建築が登場すると、のちに頭貫の断面が扁平に、かつ成も大きくなっていくという。

この現象に併行して、大仏様の影響もあって飛貫などの頭貫以外の貫が登場し、この頭貫と飛貫とのセットにより建築の軸部がより強固になっていくことに留意したい。関西や瀬戸内の顕密寺院に頭貫と飛貫のみのセットが多い傾向にある背景について、この地域で大仏様建築の影響を受けた東大寺系の工匠が活躍したこととも決して無関係ではないだろう。一方の東国では、頭貫・飛貫にくわえ台輪をセットに採用したものが相対的に増えていく。後者の現象は、鎌倉の禅院建築の影響もあったものと思われる。

この飛貫であるが、大仏様建築の典型例となる浄土寺浄土堂の軒下のものが早い事例となる。

頭貫と飛貫のセットは、鎌倉期には東大寺を中心にみられ、東大寺法華堂礼堂や東大寺鐘楼などでみることができる。また、元興寺極楽坊本堂では、扉を吊るための藁座を設けた飛貫が用いられ、京都の蓮華王院本堂では軸部の強化を意図した飛貫が用いられるようになる。他方で、先にも触れたとおり、東国に位置する栃木の鑁阿寺本堂では、頭貫と飛貫と台輪がワンセットで用いられている。

（３）頭貫を覆う台輪

ここで改めて、台輪が組物を乗せ、かつ頭貫を覆う部材であることに留意したい。左図が大仏様の頭貫の模式図、右図が鑁阿寺本堂の飛貫・頭貫・台輪をワンセットで用いた状況の図となるが、頭貫のみを用いた場合、柱の頂部をかき込み、頭貫を上部から輪薙込み、大斗を上からかぶせて脳天を釘で打ち固め、その上に組物を設置する。さらに台輪を用いた場合は、頭貫の上に台輪を載せ、その上に組物を設置して小屋組や軒の荷重を承ける。

この技法上の特徴をふまえ、中国の事例をみてみよう。中国に現存するもののうち、台輪の初例となるものは山西省に位置する大雲院弥陀殿である。ただこの事例では、まだ室内では台輪が用いられておらず、側廻のみで用いられている。時代が下って、下華厳寺薄伽教蔵殿では室内でも台輪が登場するようになる。この台輪は遼代・北宋代以降から中国河北地方の建築でしばしば用いられるようになり、さらに時代が下ると、例えば山西省襄汾の関帝廟のように、詰組ではないけれども台輪が用いられる事例など、日本ではあまり見ないバリエーションが中国全土で確認できるようになる。

ところで、日本の事例において、組物は必ず柱上にくわえ中備の位置に配置される。中国の場合も、金代以前の遺構を紐解くと、柱上に組物が無い事例は管見の限り見当たらない。柱上に組物を置かず、かつ柱心と異なる場所に組物を置くと、構造上バランスが悪くなり、仮に横力がかかった場合に頭貫が抜けてしまう。頭貫が抜けないようにするためにも、輪薙込んだ柱上で組物を置く必要が生じる。

この構造上の特性をふまえ、台輪の機能についてあらためて考えてみたい。先に辞書上の意味を確認したように、台輪が下の部材を覆う積極的な役割とは一体何か。考えるに、この部材は頭貫が外れないよう上から覆い、かつ組物をその上に安定して置くことができるものとしての役割が期待されたのではないだろうか。詰組はこの場合、輪薙込んだ頭貫が抜けないようにするため、小屋組や軒先の荷重を均等に伝える「重し」として存在したと考えられるのである。

（４）減柱造と額・台輪

以上をふまえ次に留意したいのは、これらの横架材が、中国における桁行方向の減柱や移柱とも深く関わることである。

桁行方向にみる減柱造の初例として仏光寺文殊殿が挙げられる。内部をみると、来迎柱が立ち、そこに頭貫（欄額）が輪薙込まれ、飛貫（由額）が挿し込まれ、各々が妻柱にまで架けられることで、背面入側筋のそのほかの柱が省略されていることがわかる。支柱が後補として追加されているので、結果としてこの試みが構造的に破綻したことをうかがえるが、桁行梁のような巨大な貫が大きく架けられ、本来あるべき柱を省略するよう試みられたことに大きな特徴を見出せる。中国建築史ではこの頭貫を一般に内額とも呼ぶ。

この架構はほかにもみられ、例えば山西省朔州にある崇福寺弥陀殿では、背面入側筋の柱が正面側廻の柱筋と揃っていないが、これも内額を用いることで内部空間が減柱・移柱されたことで可能になったものだ。岩山寺文殊殿では内額の下方で綽幕方と呼ばれる貫とも肘木とも見て取れる部材が来迎柱に挿し込まれ、背面入側筋で移柱が生じている。

額を用いた減柱と移柱は、山西省中・南部や陝西省東部、いわゆる黄河流域でさらなる多様化を呈するようになる。大雲寺大雄宝殿では、内部空間を見ると、正面入側柱に妻壁から延びた綽幕方が挿し込まれ、その上に内額が載っていることがわかる。興味深いのは、今までみてきた内額が柱頭を欠き込んだ凹部に輪薙込んでいたのに対し、この事例では内額の下半分ほどのみ輪薙込まれ、内額がまるで頭貫と台輪が複合したもののように扱われていることである。そして、この巨大な内額により中央間の柱が減柱されているのである。

武邑にある会仙観三清殿では、巨大な額が側廻正面に用いられている。側廻りで軒を支承する位置にあるため、この額は檐額と呼ぶ。興味深いのが、ここでは綽幕方が一部で頭貫のように用いられ、その上に檐額が台輪のように上から載せられていること、そして側面をみると、一般的な台輪と頭貫が採用され、この台輪と頭貫の成と檐額の成とがほぼ一致していることである。位置および構造上、檐額が台輪と頭貫の代替として用いられているのである。

（５）額・台輪と柱配置の融通性

山西省呂梁にある金代に創建された香厳寺毘盧殿では、一般的な台輪と頭貫が用いられているが、正面入側筋では輪薙ぎ込まれた柱上の頭貫に、内額とも台輪とも見て取れる巨大な部材が載り、かつこの部材も半分ほど柱の凹部に輪薙ぎ込まれている。この事例で留意すべきは、この額が用いられた中央間の柱上に組物がなく、額の上で柱位置をずらすように組物と梁が移動させられていることである。額が台輪のように用いられ、かつその上の組物と梁の取り扱いに新たな展開が見てとれるのである。

運城の清涼寺大雄宝殿も同様に、正面入側筋において、柱頭に綽幕方が輪薙込まれ、その上に内額が台輪のように載せられている。同地域に現存する芮城城隍廟享亭では、正面入側筋において綽幕方上に檐額が設けられている。このような架構を用いた類例が同地域で少なからず散見されるが、ここで興味深いのは、正面脇間の一部と側面で一般的な台輪と頭貫が用いられるのに対し、正面脇間の一部において檐額と一般的な台輪それぞれの上端が揃うよう双方が接続していることである。額と台輪・頭貫が区別されていると同時に、額と台輪が組物の高さを揃えるための横架材として同様に機能しているのである。

官衙建築の一つとなる臨猗州署大堂では、綽幕方の上に檐額が設けられることで、正面の軸部が構成されている。内部に設けられた一般的な台輪と頭貫をセットで用いた架構と区別されていることにも留意すべきである。また、汾陽五岳廟五岳殿では、同じような方法で正面側廻の架構が形成されている。とくに留意したいのは、木口を見ても明らかなように、綽幕方の上に設けられた檐額が、香厳寺毘盧殿の場合と同様に部材の半分ほどまで輪薙込まれ、かつ台輪と頭貫各々の部材の形が区別されるよう象られていることである。

禹王廟献殿は、額を用いることで組物の位置が自由に決定された事例となる。いわゆる柱上組物や中備組物といった区別、あるいは多包柱か否かといった区別が通用しない事例となる。正面は桁行三間となるが、背面は桁行五間となる。巨大な檐額を用いることで、その上の組物と梁の位置が柱心からずれている。額の上下で架構が分離しているため、正背面の柱間の差異が許容された事例となる。

晋祠廟献殿は献殿や戯台といった儀礼を行う建築である。このビルディングタイプでは、檐額あるいは巨大な台輪が設けられた事例が多々みられ、かつこの事例も柱上の一部に組物が無い事例となる。霍州観音廟過街閣楼では、内部を見ると一部に一般的な頭貫と台輪を用いた軸部があり、奥の基壇上において綽幕方上に巨大な内額に似た巨大な台輪のような部材が設けられ、移柱が成立している。そしてこの事例においても、組物位置も柱心から若干ずれている。これもこの巨大な横架材があるからこそ可能となった事例である。

（６）柱の省略・移動と横架材

このような技法が、中国の同地域を中心に、官衙建築や仏教建築などのさまざまなビルディングタイプで用いられている。額という巨大な横架材のおかげで、移柱や減柱の多様化が、とくに中国の黄河流域周辺でさまざまに展開したのである。ここで留意したいのは、仏光寺文殊殿をはじめとする減柱造の事例や、額を用いた減柱・移柱の事例、そして柱と組物位置をずらした事例において、支柱が後補として設けられる傾向にあることである。移柱や減柱といったある種のアクロバティックな技法が金代から元代にかけて果敢に試みられてきたものの、その結果、支柱がないと構造的に破綻してしまう結果が散見されるのである。明代にも同様の技法が一部で継承されるが、このような失敗の経験が継承された可能性がある。といういのも、元代や金代と比べるとこのような建築構造的に果敢な試みは沈静化してゆくのである。

中国建築史でいう桁行方向にみる減柱造の発生と額の展開をみてきたが、日本の事例と併せて振り返ると、宋代から元代にかけて、あるいは鎌倉時代から室町時代にかけて、頭貫と飛貫にくわえ頭貫と台輪、あるいは綽幕方と額のセットが架構に用いられるようになった。しかし、綽幕方と額は日本へ「本格的には」入ってこなかった。他方でこの架構は、中国金・元代の建築において移柱・減柱との関わりでしばしば用いられ、やがてこの技法が起因して、額あるいは台輪上の組物が柱心の位置から解放され、額あるいは台輪を境に上下で架構の論理が分離していく。

中国では庁堂の場合、遺構をみる限り山西省で萌芽した減柱・移柱が黄河流域で大々的に展開するようになり、さらには巨大な額あるいは台輪のおかげで、その上の組物と虹梁がその位置を柱位置からずらせるようにもなったと考えられる。中国の宋代以前の建築では、頭貫だけを用いたもの、あるいはその上に台輪を被せたものが展開し、柱上に組物が設置された。この台輪を用いた架構は、日本では詰組を用いた禅宗様建築として、朝鮮半島では多包式の建築として展開した。おそらく、台輪が組物を安定して置くための台として、さらには頭貫が外れないための覆いとして機能したのではないか。他方で、中国の黄河流域では、頭貫にくわえ巨大な台輪のような重量級の額が用いられる。ゆえに、柱心の上に組物を置かなくても、仮に横力が加えられたとしても頭貫が外れないよう造営することが可能になったのではないかと考えられるのである。

おわりに

この金・元代に展開した額と減柱・移柱の技法が日本の中にまったく入ってこなかったのかというと、実はそうではないと思しき事例が想起される。その事例が、唐招提寺講堂である。１３世紀の鎌倉期に大々的に修理された建築だが、内部空間を見ると、減柱を試みた巨大な桁行梁が確認できる。これはまさに内額の一種と見ることができる事例である。しかし、ここでも支柱が後補として設けられているため、構造的破綻をきたしたことが見て取れる。中国の黄河地方で展開した桁行方向にみる減柱・移柱とそれを可能にした架構法が、実は日本の鎌倉時代に一部入ってきたのではないか。しかしながら、何かしらの理由で、このような巨大な横架材による桁行方向の減柱が普及しなかった。この唐招提寺講堂は、支柱が必要とされるがゆえ、残念ながら構造的に失敗に終わったのではあるが、このような新しいテクトニック・カルチャーの実践を果敢に試みた、極めて貴重な事例に位置づけられるのではないだろうか。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 野村俊一	４．巻 73
２．論文標題 空間の研究とモノの研究のあいだ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 建築史学	６．最初と最後の頁 pp.36-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永友 貴博・野村 俊一	４．巻 2019(建築歴史・意匠)
２．論文標題 中世長谷寺本堂における御帳の開帳と施入	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 pp.769-770
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 江原 正司・野村 俊一	４．巻 2019(建築歴史・意匠)
２．論文標題 仙台藩小城下町吉岡の屋敷地とその変遷について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 pp.975-976
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山崎 有生・野村 俊一	４．巻 2019(建築歴史・意匠)
２．論文標題 中世における石清水八幡宮本殿の調度の変遷について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 pp.745-746
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 何 戌琪・野村 俊一	4．巻 2019(建築歴史・意匠)
2．論文標題 『作庭記』にみる建築の技法について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 pp.811-812
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中川 佳・野村 俊一	4．巻 2019(建築歴史・意匠)
2．論文標題 西安化覚巷清真寺礼拝殿の勾連搭とその接合部について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 pp.415-416
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 永友貴博・野村俊一	4．巻 2018(建築歴史・意匠)
2．論文標題 古代・中世長谷寺本堂の御帳とその実態・意味	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 pp.609-610
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 嶋田瑛・野村俊一	4．巻 2018(建築歴史・意匠)
2．論文標題 雲崗石窟中期窟にみる三角飾・円飾について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 pp.45-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中川佳・野村俊一	４．巻 2018(建築歴史・意匠)
２．論文標題 西安化覚巷清真寺伽藍にみる組物とその格式	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 pp.49-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎有生・野村俊一	４．巻 2018(建築歴史・意匠)
２．論文標題 「八幡宮寺内外殿之間事」の典拠・成立年代・背景について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 pp.621-622
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西松秀記・野村俊一	４．巻 2018(建築歴史・意匠)
２．論文標題 「清明上河図」に描かれた建築・船の窓・建具について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 pp.47-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野村俊一	４．巻 69
２．論文標題 書評　杉野丞『近世禅宗寺院の空間構成・意匠の研究』	５．発行年 2017年
３．雑誌名 建築史学	６．最初と最後の頁 pp.127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 河原塚和子・野村俊一	4．巻 2017(建築歴史・意匠)
2．論文標題 相国寺方丈の空間と観音懺法	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 pp.123-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永友貴博・野村俊一	4．巻 2017(建築歴史・意匠)
2．論文標題 『石山寺縁起絵巻』にみる御帳とその空間――施入と参籠を中心に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 pp．121-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎有生・野村俊一	4．巻 2017(建築歴史・意匠)
2．論文標題 宮城県名取市熊野新宮社にみる社殿・祭神の配置と本地仏	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 pp．105-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　7件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Shunichi NOMURA
2．発表標題 To be Surrounded by “sansui” in Medieval Zen Temples: A Study in Architectural History Based on the Case of Muso Soseki
3．学会等名 Substance and Symbol in Japanese Architecture（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 野村俊一
２．発表標題 デフォレスト館の創建と明治期の履歴
３．学会等名 重要文化財『デフォレスト館』 の価値について 東北学院史資料センター・東北学院大学研究ブランディング 事業合同主催2019年度公開シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野村俊一
２．発表標題 空間とモノの境界――空間史学の回顧と学際研究の経験から考える
３．学会等名 建築史学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野村俊一
２．発表標題 米澤貴紀「神仏習合の建築空間におけるオリジナルの問題」コメント
３．学会等名 建築におけるオリジナルの価値に関する［若手奨励］特別研究委員会　第４回委員会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野村俊一
２．発表標題 中世禅律僧の修造と東大寺
３．学会等名 建築メンテナンスの歴史学の構築に関する基礎的研究（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野村俊一
２．発表標題 中世仏堂の移柱・減柱と東アジア――貫・梁・台輪をめぐって
３．学会等名 東アジア木造建築史研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野村俊一
２．発表標題 民家の技法と空間
３．学会等名 国営みちのく杜の湖畔公園 ふるさと村講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 平井聖編集代表 ； 後藤治編集幹事	４．発行年 2020年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 734
３．書名 日本の建築文化事典	

１．著者名 藤井恵介先生献呈論文集編集委員会編	４．発行年 2018年
２．出版社 中央公論美術出版社	５．総ページ数 456
３．書名 『建築の歴史・様式・社会』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関